

歴史が動く—声が聞こえる

Obinata Sumio

大日方 純夫

歴史と言えば、暗記中心という印象が強い。動かない歴史である。他方で、歴史にロマンや物語を求める傾向も強く、学校での歴史は毛嫌いされる。教科書の歴史は、干からびた歴史に見える。しかし、歴史とは、教科書とは、本当にそうしたものののだろうか。

谷川俊太郎の「みみをすます」という詩に、「いつから つづいてきたともしれぬ ひとびとの あしおとに みみをすます」という一節がある。歴史のなかの人びとの足音や声に耳をすましてみたい。「うったえるこえ おしえるこえ めいれいするこえ こばむこえ あざけるこえ」が聞こえてくる。「きょうへとながれこむ あしたの まだきこえない おがわのせせらぎに みみをすます」ことができる歴史的感性をみがきたい。

「学び舎」のこの本は、そうした感性を触発し、歴史意識を刺激する素材に満ちている。学校教育の現場から出発し、子どもたちの現実に足場をおいているからである。具体的な人、具体的な事柄、目に見える図像(絵・写真)から歴史のなかに入っていく工夫がこらされている。

小さな歴史と大きな歴史

人類の歴史の過程のなかで、それぞれの個人は、生まれてから死ぬまでの、ただ一回だけの、繰り返すことが不可能な歴史を生きてきた。全体の大きな歴史は、このような無数の個人の小さな歴史から成り立っている。富岡製糸場で製糸技術を学んだ横田英(p.168)や、東京で学んだアイヌの青年マタイチ(p.176)のように、みんな名前をもった個人として、時代のなかで生きていた(“名もない民衆”などどこにもいない)。教科書のなかに入って、そうした人びとの声に耳をすましてみたい。

歴史のなかに入る

大きな歴史は一つ一つの具体的な事実から成り立っている。歴史はすべて具体的である。ある場所の、ある出来事の、ある場面に入り込むことによって、時代の内側が見えてくる。上布田宿(現在、東京都調布市)の郷学校に入り込んで教育の様子に触れ(p.164)、府中町(同府中市)の称名寺で開かれた演説会から自由民権運動を考える(p.170)。そして、少女たちとともに吹雪の野麦峠を越えてみる(p.194)。教科書によって歴史の現場に立ち会いながら、大きな歴史の姿を生き生きととらえたい。

支配と抵抗に眼をこらす

一回だけの歴史を生きていたのは、もちろん日本の人びとだけではない。ニジェール川河口のオポボ王国の人びとはイギリスに支配され(p.186)、日露戦争下の満州では、村を追われた人びとが寒さにふるえ、生活の場を失っていた(p.188)。北京の天安門前で学生たちは日本の21カ条要求に抗議の声をあげ(p.198)、女子学生柳寛順は並川ユグァンスンの集会で「独立マンセー」と叫んだ(p.202)。教科書で戦争と支配、従属と抵抗のありように眼をこらしたい。

歴史が動くことを実感する

人びとはよりよい暮らしや自由を求めて、それぞれのやり方で行動を起こした。府中の人びとは自由民権の演説に耳を傾け(p.170)、五日市の人びとは自らの手で憲法案を起草した(p.172)。富山県の女性たちは米屋に押しかけ(p.204)、平塚らいてうは月のように生きることを拒否した(p.206)。普通選挙を求める行進は、「奴隷から人間へ」と叫んだ(p.208)。この教科書で、歴史が動くことを実感したい。

そうした歴史意識を育むことが、未来をつくる歴史認識には欠かせない。